

# 伝説の未踏峰

## カカボラジの偵察から

①

【注】本紙ではミャンマー最高峰の表記を「カカボラジ」としてきましたが、今後は現地の呼称にならって「カカボラジ」とします。

山を越えるインド。北へき、二週間の徒歩を経て、すつとくとカカボラジまじり雪をかぶった峰々で、その向うには中国だ。が間近に望めるところまで、と村人が指をさす先は標来た。標高一、八五〇の、高四千を超す高い峰々。



# 素人ポーターの逃亡の日々

## やまない雨・泥道を行進・襲うヒル

鎖国的政策のために約半世紀も外国人の入山が果たせなかつたミャンマー最高峰のカカボラジ(標高五、八八一)。

この未踏峰の初登頂を目指し、一橋大山岳会の偵察隊(引地真隊長三人)が二・三月の二か月間、同峰周辺を視察した。登山隊受け入れなど全く初めての同国。隊に同行し、神秘の山への入り口まで迫ってみた。

(文・上堀隆、写真・川口敏彦)

首都ヤンゴンから、気の遠くなるような距離を北へ北へ。飛行機、車を乗り継ぎ、二週間の徒歩を経て、すつとくとカカボラジまじり雪をかぶった峰々で、その向うには中国だ。が間近に望めるところまで、と村人が指をさす先は標来た。標高一、八五〇の、高四千を超す高い峰々。

川の中を進むポーターたち。行程は無数の川や沢を越えなければならぬ(マツチャン村付近)



で全員素人。大型ザックがヤンゴンのマーケットでも手に入らず、ハジと呼ばれる竹かごを頭と首で支えて運ぶ。もちろん登山靴などはないので、足回りはサンダルかはだしという軽装備だ。

中国やネパールのポーターは三十歳以上は拒否のに対し、ラワン族は二十歳以下とかなり軽い。それでも二日目には、「ポーターが十五人も逃げちゃった」との報告があり、あわてて追加募集するはめに。その後ポーターの「逃亡」は続いた。

さらに隊を悩ませたのは雨の連続。伝説に登場する狩人兄弟の魂が「雨を降らせる」と言い伝えられている。泥道を行進する日々が続く、地面からヒルがはい上がり、血を吸う。ぬれた血まみれの衣服を乾かしながら、また、すぶぬれになる日が続いた。

# 伝説の未踏峰

## 切迫した偵察から

①

「季節としては最後の手 一滴も降らない好天続き。ヤンス・フッキーですよ。」

乾期真っただ中の二月五日、首都ヤンゴンでスポーツ局を訪ねた時、トゥン・セイン局長は笑顔で引地真隊長三三を激励したものだ。これ以上遅いと、融雪による増水やモンスーンの影響があり、登山には不向きだというのだ。

しかし、カカボラジ周辺は雨続き。足元は常に悪く、時に雷雨やヒョウにまで襲われた。一か月間の徒歩でのギヤパン中、雨が降らなかつたのは一日だけ。この時期、ヤンゴンでは雨が

首都での類推は全く的はずとも言われた。

日本人にとっての富士山と違い、ほとんどのミャンマー国民にとって、カカボラジは地図上の山でしかない。人々は実物はおろか、写真さえ見たことがない。マスコミも扱うことはな

一九五〇年代後半に政府が行った中国との国境調査の報告書くらいだ。

りの詳しい地図を持ってないか。あれば欲しいんだ」と、ギヤパン中に出会ったある軍幹部が引地隊長に耳打ちしたほどだった。

# 神秘の山は情報空白地帯

## ●地図は手書き●道の記述も想像混じり

れだった。 天気だけではない。「運の地理で教わった知識止まりだ。 搬用にラバや馬が調達でき

る」ということだったが、ほとんどで利用不可能。新鮮な野菜や果物を食べたス・キングドン・ウオード人はマラリアになる」などが調査して記した著書が、

次大戦前に調査・発行された古いものだった。北部の偵察後、語った。本隊に向町アタオでは、軍当局と接し、頂上制覇のカギは、情報の深い谷をいかに正しく触したが、見ることで現地情報で埋めていくが、アタオ道は想像がかなり



軍の地図を前にアアローチ道を検討する偵察隊のメンバー（アタオ町で）

（文・上堀慶、写真・川口敏彦）